

2023年

フランス語教育海外スターージュ報告書

フランス語教育国内スターージュ運営委員会編

日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、在日フランス大使館

本報告書は、2023年3月16日（木）～3月19日（日）に実施された日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、在日フランス大使館主催のフランス語教育国内スタージュの修了者のうち、2023年8月にフランス（ブザンソン）で実施された教員研修コースに参加した方々によるフランス海外スタージュの報告書です。

2023 年ブザンソン FLE 夏季研修報告書

加藤三和

以下の文書は 2023 年度 7 月 31 日から 8 月 10 日にかけて行われたブザンソンでの夏季フランス語教員研修に関する報告である。報告書を作成するにあたり、今回の研修実施に携わり貴重な機会を与えてくださった日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、また在日フランス大使館関係者の皆様にこの場をかりてお礼申し上げたい。

I. スタージュの概要

授業は全てブザンソンにあるフランシュ＝コンテ大学付属の応用言語学センター（CLA: Centre de linguistique appliquée）の主催で行われ、街中の大学校舎を借りて実施された。参加者はみなフランス語の教員だが、各人が対象とする学習者は必ずしも大学生とは限らず、中には幼稚園児や小学生のクラスでフランス語を教えているという教員もおり、参加者のモチベーションもさまざまである。今年度は 7 月の半ばから 2 週間の研修が 3 タームずつ用意されていて、渡航前に期間を選択することができた。タームによってプログラムの内容が異なるため、参加者の中には複数の期間にわたり受講しにきている教員もいたが、日本からは大学の授業の関係もあり参加者全員が 3 ターム目にあわせて渡仏した。

3 ターム目のプログラムは午前 2 講座、午後の部 1 講座とそれぞれに 2 つずつモジュールが用意され、事前に受講したいクラスを決めて出発前に希望を申請する。選択した 3 つのモジュールは 2 週間かけて全 8 回用意され、研修の初日以降はこれに加えて夕方の「フォーラム」と呼ばれるアトリエへの参加（3 回以上）が義務付けられている。

以下に、参加したすべてのモジュール、およびフォーラムを報告する。

[モジュール]

1. Inverser la classe avec des ressources numériques
2. Favoriser les pratiques ludiques et créatives
3. Favoriser les interactions à l'oral

[フォーラム]

1. Visite Médiathèque
2. Activités brise-glace par niveau
3. Panorama de la chanson Francophone
4. Utiliser la langue de bois en classe 1-2

II. モジュール 1 : Inverser la classe avec des ressources numériques

反転授業の効果や特徴を把握し、現存する様々なプラットフォームや電子媒体を効果的に用いることで相乗効果を図るモジュール。パソコン教室を使って行われ、実際に様々なプラットフォームや電子ツールを使いながら、具体的に授業のどの段階で導入できるかを知ることができるという点で非常に有益だった。

はじめにオーガナイザーである Langer 氏から反転授業に関するレクチャーがあり、その後各回では、クラスの中で活用し学習に役立てるための方法やアイデアを参加者同士で議論し、実際にどのような授業展開をしているか意見交換の場が多く設けられた。

語学だけでなく、中学や高校では近年反転授業を導入しようとする動きが見られるものの、今回参加していた研修者のほとんどは教科書を使った伝統的な文法中心主義的アプローチで授業を行っており、反転授業がもたらす効果と従来のクラスとの併存についても積極的な意見が交わされた。実際に担当教員である Langer 氏も「反転授業は伝統的なクラスのあり方とも共存でき、文法中心主義を否定するためのメソッドではない」という点を強調していて、反転授業を導入している教員たちの実践例や失敗例は授業案を考える上で参考にもなった。また、本来教材として開発されていないツールや、語学教育を目的としていないいわゆる「生教材」の扱いについても扱われた。授業の中では、実際にビデオや詩、宣伝の一部などを見ながら、授業内外にどのタイミングで、どのように、そしてどのような目的で導入できるか、その可能性や有用性についても意見を出しあった。普段の教材についても「これを行うことで学生たちは何をどのように運用できるようになるのか」を考えることが学習効果の最大化につながる点が強調された。

III. モジュール 2 : Favoriser les pratiques ludiques et créatives

このモジュールでは「できる限り何も使わず、学生たちが身体を動かしながら自らの語学力を最大限にアウトプットすること」をモットーに、教室でも机を取り払い、椅子を丸く並べて授業が行われた。FLE 教員の傍らで演劇活動もしているという Beissel 氏の授業は、演劇の稽古で実際に使われるウォーミングアップからもインスピレーションを受け、「聞く・話す・書く」の 3 技能を中心に様々な要素が活動に取り入れられている。

授業で提示されるアクティビティは、アイスブレイクにはじまり、A1 から C1 まで次第に複雑で難しくなっていく構成である。授業では毎回初めにアクティビティの狙いや注意点、対象とするレベルについての説明があり、その後全体で提示されるほぼ全てのアクティビティを行った。実際にそれぞれの活動を行ってみることで、自国のクラスでも導入できるか、または各自が学習者のレベルにあわせてアレンジ可能かを確かめることができ、日本のクラスでも応用可能なアイデアも多くあった。

このクラスで提示されるアクティビティの狙いは主に 2 つある。1 つ目は学習者が持つ

ている知識を総動員して、なるべく多く発話・発信すること。2つ目は、遊びや演劇の要素を取り入れることによって、人前で発話することの抵抗やストレスを減らし、クラス全体の発話を促していくことである。普段われわれは総じて、「授業は真面目に行われなければならない」と考えがちだが、遊びの要素を排除しないことによってクラスの雰囲気は向上し、学習効果の向上が期待できることがわかった。一方、授業で提示された活動の多くは、B1以上を想定したものが多く、A1 から A2 のクラスが一般的な日本の語学の授業ではすぐには応用できないと感じた。

IV. モジュール 3 : Favoriser les interactions à l'oral

モジュール 1 と同様に Langer 氏によるクラスだが、授業内での学生同士の発話をどのように促すかに焦点を当てたコースで、主にグループワークを中心に展開された。授業を進めるにあたり、まず « Interaction orale » と « Production orale » の違いについての講義があり、「Interaction」について簡単な定義がなされた。インターアクティヴィティとは言語の相互的置き換えではなく、相手の文化や慣習の違いを踏まえた上で相手の言語を運用し、適切に反応することである。つまり、「Interaction」を授業の中に積極的に取り入れるためには、教材の選定、導入の仕方や文法や表現のなど、さまざまな狙いをあらかじめしっかりと定めておく必要があり、想定する場面設定や会話はなるべく教材化されていない「自然な」媒体である必要がある。授業の中では、こうした「自然な」教材を使用するにあたり、教材化の際には、発話の先に相互的活動があること、そのためにはまず聴解による理解が先決であること、そして授業の組み立てからは理解から発話への順序を意識することが強調された。さらに、学習者の多くはフランス語を日常的に使うことがないという言語的状況を踏まえたうえで、文化的要素（ジェスチャーや言い回し、言葉が使われる特定のシチュエーションなど）にも注意する必要があるという点も、授業を組み立てる上での重要な指摘であった。

各教員が対象とする学習者の多くにとってフランスは決して身近な国ではなく、したがってフランス語話者と会話する機会はほとんどない。こうした状況で学習者同士がインターアクションを行うにはまず YouTube やビデオ、映画といった映像を使った教材の使用が不可欠である。授業内では、海外の学習者たちのために映像資料を教材化したツールとして、CLAPI-FLE というプラットフォームが紹介された。CLAPI-FLE はフランスの FLE 教員たちが実際に日常生活の会話や買い物、電話の様子を録音・録画し教材化したもので、全てのクリップがレベル別、また状況別に分類されており、さらにそれぞれの会話にはスクリプトがついている。授業ではこれを実際を使ってグループワークを行い発表した。各グループで1回分の授業の教案を作成し、それにあわせてインターアクションを促すような活動を考え、実際にクラス全体で活動を行なってみる、というものである。発表時には、提案された教案の問題点や良い点を指摘しあって、各回必ず議論の時間が設けられた。私のグループにはイラン人とヴェネズエラの教員がおり、以下のような教案と活動を提示した。

Scénario pédagogique

http://clapi.ish-lyon.cnrs.fr/FLE/affiche_contexte.php?affiche_extrait_encours=%2084&extrait_encours=%2084

Titre de la séquence

Invitation à une soirée picnic à l'iranienne, au téléphone.

Type de public

Adolescents

Niveau des apprenants

Les niveaux du CECRL A2

Objectifs du cours

- **Connaissances socio-culturelles**
Prendre connaissance de que la notion picnic n'est pas la même pour tout le monde.
- **Compétences communicatives et fonctionnelles**
Inviter, demander, accepter, refuser une invitation à un picnic.
Utiliser les allocutions, les interjections et les vocabulaires relatives aux invitations.
- **Compétences langagières**
Compréhension orale et expression orale
- **Connaissances linguistiques**
Le vocabulaire - date, heure, adresse.
La grammaire - conditionnel présent.
Les actes de paroles – inviter, demander, accepter, refuser.

Durée de la séquence

45 minutes.

La séance fait partie d'une série du cours dans laquelle les apprenants apprennent le conditionnel présent.

Introduction en classe - 15 minutes.

Déroulement de l'activité – 20 minutes.

Clôture – Débat interculturelle sur le picnic dans le monde (10 minutes) en classe.

Méthodes et techniques de travail

- Approche actionnelle, favorisant l'interaction entre les élèves (jeu de rôle, débat).
- Nous alternerons le travail individuel et collectif.
- Nous alternerons des exercices linguistiques avec des activités d'expression orale et de jeu de rôle.

Déroulement du cours

1. Introduction en classe

- 1) faire écouter l'enregistrement et demander aux élèves de quoi il s'agit.
- 2) donner un questionnaire et faire écouter une 2eme fois.
- 3) faire écouter une 3eme fois pour remplir la transcription à trous du document.
- 4) faire sélectionner les verbes au conditionnel sur la transcription.

2. Déroulement de l'activité en binôme

Jeu de rôle : indications de comment on invite, donner une fiche imprimée / ppt avec de réponses alternatives pour accepter ou refuser une invitation.

Consigne du jeu : Nous sommes entre amis, étudiants internationaux, qui veulent organiser une soirée picnic à l'iranienne. Vous appelez un.e ami.e, pour l'inviter en précisant : le jour, la date, heure et le lieu.

3. Clôture en classe

Débat : interculturelle sur le picnic dans le monde (10 – 15 minutes).

Miwa et Emperatriz

Mise en situation

Consigne du jeu : Nous sommes entre amis, étudiants internationaux, qui veulent organiser une soirée picnic à l'iranienne. Vous appelez un.e ami.e, pour l'inviter en précisant : le jour, la date, heure et le lieu.

Démonstration : Le professeur montrera à l'aide d'un apprenant, comment le jeu se déroule.

Les élèves seront organisés en deux groupes A et B.

Puis, ils se mettront par deux, ils se présenteront, donneront leurs nationalités.

Un rangé sera le groupe A et l'autre le groupe B

Puis ils se mettent dos-à-dos, et se téléphonent. La rangé A invitera la rangé B. 2-3 minutes.

Puis on inverse les rôles. 2-3 minutes.

Ensuite, on choisit quelques volontaires pour présenter leur dialogue au reste de la classe.

Et on passe à animer le débat.

M & E.

V. フォーラム

フォーラムは毎日替わりのアトリエで、開講日初日にプログラムのタイトルとレジュームが配布され、研修中に少なくとも3つ参加することが義務付けられている。申し込みは開講日初日から可能で、リストに手書きで名前を書いていくが当日その場で決めても参加できる。最後のモジュールの後に2時間かけて行われるもので、参加者の多くは毎日何かしらのアトリエに出席していた。アトリエの内容は理論よりも実践に寄っており、授業の中で行う具体的なアクティビティや、発声法やストレスへの対処症など教員のクラス運営にすぐ役に立ちそうなものが用意されている。

今回は授業内アクティビティの可能性を広げる内容に関心があったので、新学期やクラスのはじめに導入できそうなアイスブレイクのさまざまな方法、教材化できそうなフランスのポップス・ジャズの紹介、フランス語のジェスチャーなどを選択した。いずれも参加型のアトリエで、各自がそれぞれのアクティビティを体験することができた。

教員としてクラス運営の立場に立つと、今回の研修のように自らが学生の立場になってクラスの活動に参加する機会は殆どない。しかし、アイデアを出しあったり議論したりするだけでなく、実際に身体を使って活動に参加することによって、教員側とは異なるストレスや難しさを感じるのが体感できた。今後授業を組み立てる時にも留意し続けたい点である。

2023 年 CLA 夏季スタージュ報告

中田 麻理

2023 年 7月31 日から 8月10 日まで、フランス、ブザンソンのフランシュ=コンテ大学 付属応用言語センター(CLA)にて開催されたフランス語教育研修に参加した。本報告では主に受講した研修内容と奨学金のトラブルについて記述する。

出発から受講開始まで

研修は 7 月 31 日 (月) 開始であった。非常勤先の授業が 7 月の 4 週目までであったので、28 日 (金) の飛行機で渡航して 29 日 (土) 着、30 日 (日) にパリからブザンソンに移動した。在日フランス大使館担当者の方を通し、事前に航空券の日程を提出し、前泊を申し込んでいたので、前泊のホテルとパリ-ブザンソン間の移動に関してはキャンパスフランスで手配していただいた。しかし、30 日のパリ発の TGV が早朝だったのと、手配されたホテルがロワシー空港から有料のシャトルバス利用という不便な場所だったため、最終的にキャンセルすることにした。キャンセルに関してキャンパスフランスに問い合わせても返信がなかったため、直接ホテルに電話した。奨学金からは利用しなかったホテル代として 10,43€ が引かれていた (後述するが奨学金の残額も、報告書執筆時点でまだ支給されていない)。今回日本から参加した研修生は 3 名だったが、全員リヨン駅から 9 時 18 分発の同じ TGV が手配されていた。ブザンソン-フランシュ=コンテ駅で乗り換え、ヴィエット(Viette)駅まで移動はスムーズであった。Viette 駅から宿泊施設である Zenitude までの移動に関しては、CLA の担当者から事前に詳細なメールが送られてきたので、困ることはなかった。到着日は日曜日だったが、日曜日でも 19 時まで開いている Monoprix があったのでありがたかった。

時間割について

到着日の翌日から早速研修がスタートされた。初日の午前中はガイダンスだったが、2 日目以降のスケジュールは以下の通りである。

8h30-10h00	モジュール 1 (Module de formation 1)
10h00-10h30	休憩
10h30-12h00	モジュール 2 (Module de formation 2)
12h00-13h30	昼休憩
13h30-15h00	モジュール 3 (Module de formation 3)
15h30-17h30	フォーラム (Forums)

【モジュール】

必修科目のようなもの。モジュールは各1～3に対し、3種類用意されている中から自分で選択する。事前にメールで案内が送られてくるので、インターネットのシステムを通して登録する。出発前までには希望に基づいて時間割が作成されている。選択した科目は基本的に最終日まで同じものを受講する。

【フォーラム】

選択科目のようなもの。基本的には単発で、毎日異なるものが用意されている（2回構成のものもある）。フォーラムに関しては事前に登録する必要はなく、到着後手書きで申し込む。前日までに申し込みされていれば受講可能である。全て受講する必要はなく、全体で3コマ以上受講していればよい。

モジュールについて

モジュールは以下のものを受講した。

Module 1. Phonétique et pratiques de classe (講師 : Mariella Vitorou 氏)

毎回の授業は大まかに2部構成であった。教室に入るとまず机を脇に寄せ、15名ほどの研修生で円を作るよう指示された。「Bonjour, je m'appelle ...」などの簡単なフレーズから始め、教師が指を鳴らすリズムに合わせて正しい音節で発音する練習を行った。その後講義形式で個々の母音や子音、その教え方について学ぶパートがあった。私は以前ケベックに留学していた際に発音に関する授業を受けていたので、個々の音、発音記号、音の種類、口のどの部分を使って発音するかなどの内容は、ほとんどその復習であった。とはいえ、日本にいとフランス語ネイティブの講師に発音を矯正していただける機会はなかなか得られないので非常に有意義だった。

このモジュールで印象に残ったのは、個々の音だけでなく、リズムの練習も発音の必要な要素であるという点だ。日本の学生にとっては一部の母音や子音の発音は難しく、習得するのに時間がかかるが、一方でリズム・グループや音声に関しては練習次第で比較的早く習得できるのではないかと思った。全員起立させてリズムに合わせて発音させる方法も、声を出させるためには有意義だと思った。リズム音源などを使った練習を、新学期の始めにさっそく行いたいと思っている。

講師の Mariella は歌手でもあり、自身の Youtube チャンネルも持っている。研修期間中にコンサートが行われたが、時間が合わず参加することができなかった。研修生は優先的に入場できるよう配慮されている。

Module 2. Enseigner la grammaire autrement (講師 : Caroline Langer 氏)

3月に日本で受けた研修にこれと同じ名前の授業があり、私にとっては最も実用的な内容だったので、絶対に受講したいと思っていた。余談だが初日のガイダンスで支給された CLA のエコバッグにも « Apprendre les langues autrement » と印刷されており、CLA の標語であることがわかる。

この授業では主に、実用的なくつかの「ゲーム」を教わった。例えば、クラスを2つのグループに分け、片方のグループは教室の外に出て待機、もう片方のグループはその間にそれぞれ絵を描く。準備が終わったら廊下組が教室に入り、ペアを作って背中合わせで座る。絵の説明を口頭で聞き、「山の前に家がある…」などの説明を聞きながら絵を描く。最後に2枚の絵が合致するかを確認するというゲームなどを実際に行った。

そのほかの要素として、講師が実際に FLE の教室で行っているアクティビティを教わった。中でも印象的だったのは、中国人を主とした外国人の学生たちに、フランス語でビデオ制作をさせるという課題である。簡単な会話（近接未来を使って週末の予定を話すなど）から、「ニュース番組を作る」という比較的高度なものまで、実際の映像を見せていただいた。

Module 3. Favoriser les interactions à l'oral (講師 : Caroline Langer 氏)

担当講師がモジュール2と同じだったので、一部重複した内容だった。上述の授業と異なる要素としては、5人ほどのグループごとに何らかのアクティビティに関する教案を作成しそれを発表するという内容が含まれていた。その際、CLAPI-FLE(http://clapi.ish-lyon.cnrs.fr/FLE/projet_clapi_fle.php)にアップロードされている動画の一つを参照するという指示だった。どの動画もフランス語ネイティブによる「自然な会話」であり、トランスクリプションがあるとはいえ初級レベルだと聞き取りなどに用いるには難しく感じた。そこで、「Achat Rapide」という動画を参考に、20秒以内で料理の材料を買う会話を作成しロールプレイするという活動を発案したが、このアイデアは実際に新学期の始めに前期の復習として活用することとなった。

また、オンライン上のツールを活用する方法も学んだ。例えばグループで何かしらのテーマに沿った会話を行う課題を出し、それを録音し FLIPGRID(<https://flip.com/53f7c784>) を使って共有するなどである。ただし、CLA の教室でも研修生の機器が Wifi に繋がらないなど

のトラブルがあり、慣れるまではかえって非効率になる場合もあるだろう。とはいえ、トラブルも見越して十分な時間を確保できれば有用な方法であるとも思った。例えば4~5人ほどのグループで、近接未来を用いてグループ全員に週末の予定をインタビューするなどの課題であれば日本の初級レベルのクラスでも十分に行えそうである。

フォーラムについて

フォーラムは以下の4つを受講した。内容について簡単に記載する。

Visite Médiathèque

初日のフォーラムで、全員参加が義務付けられていたもの。CLAの図書館を訪問し、書籍を閲覧した後にパソコン室でオンラインツールの閲覧方法を学んだ。CLAの図書館にはフランス語学習系の教材が豊富に取り揃えられており、研修生同士で使っている教材について情報を交換することもできた。ただし毎日研修が詰まっていたので、研修期間を通して図書館をゆっくり訪問する時間は取れなかった。

Activités brise-glace par niveau (講師 : Caroline Langer 氏)

モジュールと一部重複する内容だったが、さまざまな「ゲーム」を研修生同士で実際に行った。例えば以下のようなものがあった。

「雪合戦」…3文で自己紹介を書いた紙を丸めて投げる。最後に「雪玉」を一つ拾って、質問をしながらその自己紹介を書いた人物を探すというもの。研修時にはとても盛り上がったが、

まず机を脇に寄せられる教室でなければ危険かもしれない。

「椅子取りゲーム」…椅子を円形に並べて着席する。中央に一名が立ち、「私は猫が好きです」などと発言する。それに当てはまる人は全員立ち上がって椅子を移動するというもの。これも椅子が移動できる教室でないと実行できないのが残念だが、動詞 *aimer* を習ったらさっそく行いたいアクティビティである。

「プルーストの質問」…「好きな色」「好きな音」「好きな香り」などのリストを使ったアクティビティ。質問リストの使い方は学生のレベルに合わせて幾通りか考えられる。

Panorama de la chanson francophone (講師 : Denis Roy 氏)

音楽はどのレベルのクラスでも使うことができる。初級クラスであればただ聴くだけでもよいという考えのもと、いくつかの楽曲や使い方のアイデアを教わった。以下はその一部である。

David Cairol, *Initiales...* CD や CV など、文字通りイニシャルを多用したレゲエの楽曲。私は初級レベルを担当することが多いので、アルファベの読み方の復習などに使いたいと思った。

Bigflo & Oli, *Bienvenue chez moi...* フランスのさまざまな地域が紹介されているのでビデオを見せるだけでも面白い。「地名がいくつ聞き取れたか」などのゲームもできる。

Nino Ferrer, *Les cornichons...* 踊りだしたくなるようなアップテンポの曲で、ストーリーも面白い。定冠詞／不定冠詞の穴埋め問題に使われた。

Utiliser la langue de bois en classe (講師 : Caroline Langer 氏)

« Langue de bois » (木のことば) とは、政治家の演説に見られるような、もっともらしく見せかけて全く意味をなさない言葉のこと。授業ではいくつかの単語のカードを使って実際に « langue de bois » を作ってみるというアクティビティを行った。始める前は絶対に無理で全く意味がないと思ったのに、実際にやってみると楽しくなってしまった。

研修全体の感想など

今回フランスでの研修に参加して、日本で受けた研修と大きく違うと思ったのは、写真や動画に対する扱い方である。上述のように、授業でも録音や録画を活用したアクティビティが紹介されていたが、それだけでなく日本以外からの研修生は実に頻繁に記念写真を撮影していた。Caroline のモジュールでは4~5人のグループで活動をした際、Caroline 自身が各グループに入って記念撮影を行っていた。そうすることで、学生の名前を覚えるのにも役立つとのこと。ただ、こと日本人の学生に関しては、写真に写ることを好まない場合も多いのではないかと思った。動画に関しても同様である。

もう一つ感じたのは、国際交流の難しさである。今回の研修生は半分ほどがイランからの参加者で、他はヨーロッパ、アジア、イラク、アフリカなどさまざまだった。「プルーストの質問」を使ったアクティビティを行った際、セネガル人の男性研修生に「嫌いな言葉」について尋ねたら、「homosexuel」だと答えられてしまった。以降、日本からの研修生仲間には、私の専門がジャン・ジュネだということは誰にも絶対に言わないようにと頼むことになった。一見政治的でも宗教的でもない様々なアクティビティが、思わぬ摩擦につながることもないとはいえない。

生活全般について

去年は暑かったそうだが、今年のブザンソンは涼しかったので、大きく体調を崩すことなく毎日過ごすことができた。ただし日によって早朝は 10°C まで冷え込むこともあったので、寒さ対策は必須である。女性であればタイツやダウンなどを持ってくるとよい。

CLA では毎年留学生や研修生を受け入れており、サポート体制が整っている。ガイダンス時に配られた冊子に、買い物ができる場所、医療機関など、すべて必要な情報が掲載されている。

宿泊施設の Zenitude は簡易キッチン付きのアパートホテルであり、食器なども含め必要なものはすべてそろっていた（扇風機、キッチン用の布巾やスポンジ、コーヒーマーカーまであったので驚いた）。タオルは 3 セット用意されており、週に一度掃除が入る仕組みだった。ランドリールームはホテル内に 1 箇所しかなく、フロントが閉まっている夜間は使えないので注意が必要。洗濯が 5€、乾燥が 3€ とやや割高で、近隣に他のコインランドリーもなかった。

宿から大学までは徒歩 15 分程度。食堂も開いていたようだが、場所が大学よりも宿に近かったので、昼食は宿に帰るか、サンドイッチなどを持参するか、大学近くのスーパーなどで購入するなどしていた。

授業後にはほぼ毎日のように何らかの文化プログラムが用意されていた。研修 2 日目の夕方に開催されたドゥー川の遊覧船クルーズには私も参加した。

Monoprix の近くのパストゥール広場では、午前中に古着屋や蚤の市が出展していることがある。時間が空いたら覗いてみるとよいと思う。

奨学金のトラブルについて

研修の参加費とブザンソン滞在中の宿泊料金、パリ-ブザンソン間の往復交通費はすでに支払われており、困ることはなかった。研修生にはそれとは別に生活費として 300€ ほど支給されることになっていた。8 月 2 日にキャンパスフランスの担当者から連絡があり、キャンパスフランスのアカウントを確認すると 293,74€ が Western Union を通して受け取り可能となっていた。Western Union を通した送金は郵便局でしか受け取れないことを確認し、授業時間との兼ね合いで 8 月 4 日に郵便局に行ったところ、私のアカウントは「エラーでブロックされている。こういったことはよくあるので再度来るように」という対応をされた。翌月曜日に再度郵便局に行ったところ、「このアカウントには何もないので、送金もとに確認するように」と言われた。キャンパスフランスの担当者にメールで問い合わせたところ、奨学金はすでに受け取り済みとなっているという返信だった。この時点で Western Union のカスタマーセンターに調査を依頼した。Western Union にはメールフォームがないので、こ

のような場合は電話をするしかない。調査には 20 日かかる、調査結果は受取人ではなく、送金者のキャンパスフランスに伝えられるとのことだった。在日フランス大使館の担当者にも問い合わせたが、奨学金はフランス国内で動いているので返金等の対応はできない、CLA の担当者に相談するよとの返信だった。その後 CLA の担当者に相談し、その時点でできる対策を行った。まず私のメールアドレスのハッキングが疑われたので、メールアドレスのパスワードを変更した。CLA の Denis Roy 氏に付き添っていただき、警察に被害届を提出した。ブザンソンを離れる直前に再度郵便局に行って事情を聞くと、8 月 4 日に Western Union のシステムエラーがあったので、おそらくそのせいだろうと言われた。だが実際のところは何かあったのかいまだにわからない。

今回のトラブルはおよそ 300€ の生活費相当額のみに関するものだったので、研修を受け、帰国するのに支障はなかった。しかし、腑に落ちない気持ちはいまでも残っている。もし提言できるとすれば、キャンパスフランスには Western Union ではなく、別の送金方法を用意してほしいと思う。来年以降の研修生に助言をするとすれば、授業との兼ね合いで郵便局の営業時間中に時間を取ることが難しかったとしても、連絡があったらただちに奨学金を取りに行くべきだと思う。

はじめに

2023年7月31日から8月11日にかけて、フランス東部ブザンソンにて行われた、フランスシュ＝コンテ大学付属応用言語センター (CLA) 主催のフランス語教員研修に参加しました。スイス国境近くに位置するブザンソンは、ジュラ山脈から流れるドゥー川によって街を囲まれた風光明媚な街で、古い時代の建築物が豊かな自然の中で調和していました。小さな街ですが、ヴォーバァンが築いた世界遺産の城塞、趣のある大聖堂や教会、ブザンソン美術館、時計美術館 (グランヴェル宮殿)、ヴィクトル・ユゴーの家 (ユゴー美術館)、隈研吾による設計のブザンソン芸術文化センター等々があり、歴史的にも文化的にも豊かです。コレットが一時期滞在していたことでも知られ、文学とのつながりも感じさせてくれます。二週間の研修先としては、大変居心地が良い街です。

この報告書では、パリからブザンソンへの移動、研修中に参加した授業やアトリエ、イベント、そしてブザンソンでの生活などについて報告したいと思います。これからスタージュに参加される方々の参考になれば幸いです。



ドゥー川

1 パリからブザンソンへ

7月29日は Campus France が手配してくださったホテル (CDG 空港近く) に宿泊する予定でしたが、私は事情があり滞在できませんでした。30日朝、Paris Gare Lyon (Hall 2) にて、他2名の日本人研修生と合流。乗車前に軽食などを用意しておくとも良いかもしれません (駅構内 Aux Merveilleux de Fred の Gaufre おすすめ)。TGV に乗ること約2時間で Besançon に。すぐに別の小さな列車で Besançon Viote へ。さらにトラムで Canot まで移動します。トラムの駅で、往復分の乗車券を購入しておくとも良いかもしれません。そこから二、三分歩き宿泊先ホテル Zenitude へ到着。チェックイン時刻まで荷物を預け、街中で日本人研修生たちとベーグルサンドをいただきました。チェックイン後、Monoprix などで食材のお買い出しをした後、各自、翌日からの研修に備えて過ごしました。

2 研修の概要

研修は7月31日から行われました。8時半から15時まで三つのモジュール (Modules) を受講した後、17時までフォーラム (Forums) を受講することになっています。どのフォーラムをいくつ受けるかは任意ですが、最低でも三つのフォーラムを受けなければなりません。以下、私が受講したモジュールとフォーラムの詳細です。最初は、毎日フォーラムを受けようと張り切っていましたが、朝8時半から夕方17時までの授業が毎日続くのは、想像以上にハードでした。

① モジュールの内容 (各講座、全8回)

・ «Phonétique et pratiques de classe» : 時間 8:30~10:00 (担当講師: M^{me} Mariella VITOROU)

このモジュールは、学習者にフランス語を正しく発音させるために、韻律 «Prosodie» などの知識を学びながら、リズムや身体の動きを通して、さまざまな実践的活動を行うというもの。フランス語特有のリズム、アクセント、イントネーションを学ぶため、スタジエールらは円形に立ち並び、Vitorou氏の指導のもと、手を叩きながら、Da, da, da とメロディーを声に出し、リズムを取るなどしながら、フランス語のフレーズや個々の音を発音します。口の形、舌の位置、破裂音か摩擦音か、明るい音か、暗い音かなど、細かく音を分類。音と発音記号との関係を細かく確認したり、フランス語母音の台形表を、何も見ないで書き出す活動もありました。Vitorou氏はプロの歌手でもあり、過去には、幼児から大人まで、さまざまな国籍の学習者を指導した経験があるとのこと。私たちスタジエールの国籍や年齢はさまざまでしたが、Vitorou氏は、それぞれの弱点や癖をすぐに見抜き、身振り手振りを使って、それぞれに合わせた解決策を導きます。学習者にストレスを与えることなく、楽しく簡単に正しいフランス語の発音を指導する方法が充実していることに驚きました。昔、習っていた声楽の基礎訓練を思い出しました。帰国後、さまざまな工夫を加えて、日本の教育現場で実践してみるつもりです。



M^{me} Mariella VITOROU et les stagiaires

・ «Favoriser les pratiques ludiques et créatives» : 時間 10:30~12:00 (担当講師: M^{me}

Francine BEISSEL)

このモジュールでは、じっさいに身体などを使った、さまざまな工夫を凝らした遊戯的な活動を実践的に学びました。Beissel 氏が紹介してくださった、学習者のコミュニケーションを促す活動の数々は、まるでゲームのように楽しいもので、活気あふれる授業空間づくりのヒントをたくさん吸収できたと思います。これは一般的に« brise-glace »と呼ばれる試みです。こうした活動を行う中で、初対面のスタジエールたちの緊張がほぐれ、教室が明るく楽しい雰囲気にも包まれたことも印象的でした。一回の授業で5つ以上の活動を学びます。すぐに実践できる簡単な活動から、少し時間を使って取り組む活動まで多くの活動を体験しました。その中でも特に印象に残っているのは、演劇に造詣が深い Beissel 先生ならではの活動です。同じフランス語のフレーズを、身振りやイントネーションを工夫しながら、喜怒哀楽を分けて皆の前で表現する活動や、小道具を使って、ペアごとに決められた会話を演じる活動など、まるで演劇の練習のようなものがありました。



M^{me} Francine BEISSEL et les stagiaires

・ « Favoriser les interactions à l'oral » 13:30~15:00 (担当講師：M^{me} Caroline LANGER)

このモジュールは、とりわけ、スタジエール一人一人が主体的に取り組まなければならない授業でした。学習者の自発的な相互交流 « interaction »をいかにはかるのか、8回の授業を通して議論し合います。Langer 氏の指導のもと、参加したスタジエールたちは、普段感じている課題を積極的に仲間と共有し、有効な解決策を探ります。この授業ではグループによる作業が多く取り入れられました。スタジエール自ら、相互交流の重要性を認識することになります。

具体的な活動の一つには、グループごとに行なった指導案の作成が挙げられます。あらかじめ CLAPI-FLE に存在するフランス語ネイティブの会話を録画した動画集の中から、各グループでどれか一つを選び、その動画をもとに、対象とする学習者のレベルや到達目標などを設定し、学習者の « interaction orale »を促す活動を考えるのです。私たちのグループで

は、B2 レヴェルの学習者を想定し、「間接話法」の習得を目指すという設定で、指導案を作成しました。こうした活動は全て Moodle で共有され、帰国後も閲覧できるようになっています。

② フォラムの内容

・ « Visite Médiathèque » 15:30～17:00

フランシュ・コンテ大学 CLA には、FLE 関係の書籍およびデジタル資料が大変充実していました。カタログ検索実習の後、図書館内を案内してもらいました。こちらで勉強することを楽しみにしていましたが、実際には日々の授業に参加するだけで全エネルギーを使ってしまったような感じです。図書館は平日の 8 時から 18 時までと開館時間が限られており、フォーラムを受講する日などは、事前に計画を立てておかないと、なかなか通いにくいです。

・ « Activité brise-glace par niveau » 15:30～17:00 (担当講師：M^{me} Caroline LANGER)

Langer 氏のこのフォーラムでも、Beissel 先生の授業と同じように、「brise-glace」のための活動をたくさん学びました。「あなたの好きな香りは?」「あなたの好きな音は?」など「Proust の質問帳 (Questionnaire librement inspiré du questionnaire de Proust)」を使って、学習者のコミュニケーションをはかる活動は、プルースト研究をしている私にはとりわけ印象に残っています。この「brise-glace」は、使い方次第で、大人数のクラスでも取り入れそうなため、日本でも使ってみたいと思いました。他にも、国籍、住んでいる場所、好きなことの三点のみを書いた紙を丸め、雪合戦のようにクラス全員で投げ合い、拾った紙に書かれた情報をもとに、誰が書いたのか当てる「brise-glace」もありました。まるで子ども時代に戻ったような感覚を覚えました。椅子を円形に並べ、代表者が投げかける質問に合わせ椅子に座るといふ、椅子取りゲームのような「brise-glace」も。学習者のレヴェルや年齢などに関係なく、こうした活動は有効なのだと思います。Langer 氏は、東京で教鞭を取られていたようで、日本人への指導にも慣れておられました。日本人は引っ込み思案な人が多いと言われますが、紹介された活動はどれも、緊張感を取り除くのに良いアイデアばかりでした。

・ « Panorama de la chanson » 15:30～17:00 (担当講師：M. Denis ROY)

シャンソンをいかにフランス語の授業に取り入れることができるのか、その実践例を紹介していただきました。楽曲の PV も歌と共に重要な要素なのだと理解しました。映像が伴うだけで、ぐんと楽しくなりますし、記憶に残ります。誰もが良く知るシャンソンから、近年の Slam まで、さまざまなシャンソンが紹介されました。同じフレーズが繰り返されたり、歌詞の内容がわかりやすいシャンソンなどは特に有効で、さらに皆で一緒に歌うことで、クラスに活気と一体感が生まれました。Roy 氏は、東京の日仏会館で教鞭をとっておられただけあり、日本人の私たちに特に親切にしてくださいました。授業以外でも、何かあれば相談

されると良いと思います。

・ « Utiliser la langue de bois en classe » 15:30~17:00 (全2回) (担当講師：M^{me} Caroline LANGER) « La langue de bois »とは何か、その理解から始まりました。フランスの政治家や知識階層などが使用する、独特な言い回し « Langue de bois »。さまざまな動画を見ながら、この言語の使用例を確認していきます。フランスの文化的な背景を学ぶことにもなるので、学習者に « interculturel »な理解も促せる有効な活動でした。2回目の授業では、実際にこの « Langue de bois »を使用して、グループごとにエッセイを作成し、発表し合いました。わざとまわりまわった言い方に換えるこの活動は、グループでエッセイを作成しているときも、他のグループの発表を聞いているときも、ともに笑いの絶えない楽しい時間でした。学習者のコミュニケーションをはかりながら、語彙力や表現力を伸ばすのに大変有効だと思いました。

3. エクスカーション

授業初日の夕方、CLA主催のイベントで、「Le Battant」という名の船でドゥー川をクルージングしました。ブザンソンが城塞都市なのだということがよくわかりました。

日曜日にCLA主催のエクスカーションに参加しました。Haut Doubsそして、城砦 Château de Jouxを訪ねました。スイスの国境付近にあるこの街は、標高が高く、雨の影響もあるのか、夏なのに相当な寒さでした。ぜひ防寒具を持参されますように。新鮮な空気を吸い込み、スイスを対岸に臨みながらのクルーズは快適でした。シャレーのようなレストランでは、郷土料理チーズ・フォンデュと地元ワイン vin jaune、デザートには gâteaux ménages をいただき身体を温めることができました。何より、このエクスカーション中、さまざまな国のスタジエールたちと交流を深めることができたことが最良の思い出です。



Haut Doubs

Château de Joux

4. 宿泊施設

準備して下さった宿泊施設 Zenitude のお部屋は、一人で使うには十分な広さがあり、寝室、キッチン、バスルームに分かれています。そして、生活に必要なものはほとんど揃っていると良いと思います。無線 LAN、テレビ、簡易シャワー室があり、備品では、た

たとえばドライヤーもありました。まな板や電気ケトルはなかったのですが、フロントに伝え
ると、その日中に届けてくれました。コンロでお湯を沸かすより早いので、お湯は備え付け
のコーヒーマーカーで沸かし、紅茶やハーブティーなどを飲んでいました。事前に申請すれ
ば、シーツ交換など、お部屋の清掃を依頼することができます。

CLA までは徒歩で 15 分ほどの距離があります。私は自転車に乗れないため利用しませ
んでしたが、一週間 2 ユーロで契約できるレンタルサイクル Vélocité を利用することもでき
るようです。この滞在中、ブザンソンでは毎日のように雨が降りました。私は傘をパリに置
き忘れたことを猛反省しました。現地でも購入できますが、やはり頑丈な折り畳み傘は必需
品だと思いました（親切にも Beissel 先生が、滞在のあいだ傘を貸してくださり、心から感
謝しています）。

5. 滞在費用の受け取り

ブザンソンに到着後、滞在費の詳細が書かれたメールが届き、担当者から Western Union
の支店あるいは郵便局で奨学金が引き出せる旨を知らされました。街に大きな郵便局が二
つありますが、映画館近くではなく、橋の近くの郵便局でしか奨学金を引き出すことができ
ないようです。パスポートと共に、スタッフに書類を提示すれば、その場で奨学金を引き出
すカードをもらえます。同じフロアにある機械にカードを差し込み、奨学金を受け取ります。

6. 余暇の過ごし方

授業が早く終わった金曜日と翌日土曜日、ブザンソンの街を探索しました。街の広場で開
催された蚤の市ではサルグミンヌのお皿を見つけ、ユゴーの家では、ついつい楽しくて長居。
探していた書籍も購入できました。時計美術館（Musée du Temps）はグランヴェル宮殿の
建築そのものが美しく、ブザンソン美術館（Musée des Beaux-Arts et Archéologie Besançon）
では、その豊富なコレクションに驚かされます。ブザンソンにゆかりのあるクールベの晩年
の大作も良かったのですが、フランソワ・ボンポンの 14 体の動物の彫刻コレクションにも
癒されました。Cathédrale de Saint Jean をはじめ、ブザンソンの歴史ある教会を巡り、貴重
な時間を過ごすことができました。とりわけ Chapelle Notre-Dame du Refuge の美しさに
心奪われました。隈研吾の設計による芸術センター（Cité des Arts, LE FRAC Franche-Comté）
には、現代アートのインスタレーションがあり、建物と空間全体が印象に残っています。散
策の後、立ち寄ったベジタリアン向けサロン・ド・テ Atelier Namon は、静かで穴場（バブ
ル金木犀茶がおすすめ）。パン屋ならば Boulangerie Caillet Cyril, 1904 à nos jours、ブラッ
スリーならば Brasserie Granvelle がおすすめです。この地にいるのだからと購入したコン
テ・チーズでは、Marcel Petite の 12 mois が美味でした。



ブザンソン芸術センター(Cité des Arts)とインスタレーション、ブザンソン美術館とクールベ《追い詰められた雄鹿》(1867)のある部屋



Maison natale de Victor Hugo

Atelier Namo

Musée du Temps

7. おわりに

この夏季スタージュでは、CLAの配慮の行き届いた受け入れ体勢のもと、FLEのメソッド、デジタル資料の活用など多くのことを学ぶことができました。講師の先生の授業の進め方も大いに勉強になりました。また、さまざまな国から参加しているフランス語教育に携わる熱心なスタジエールの方々と知り合えたことは大変な刺激となりました。学んだことにさらに工夫を重ね、日本の教育現場で活かしていきたいと強く思いました。

最後になりましたが、こうした経験を全て可能にくださったフランス語教育学会、フランス語フランス文学会、国内スタージュ運営委員会の皆様、在日フランス大使館とりわけ文化部の萩尾様、キャンパス・フランス、CLAの講師およびスタッフの皆様、なによりも苦楽をともにしてくれた日本人研修生のふたりに、この場を借りて心より御礼申し上げます。



François Pompon « L'Hippopotame »

Les Sarreguemines

Marchés aux puces